

# AFRICAN

# WEEKS 2025

6.1-6.14

📍 東京外国語大学

## 「アフリカラー！」

外大生が中心となり、色々な企画を通して  
アフリカの魅力を発信します！

アフリカの魅力を発信します！

詳しい情報はこちらから  
check!

6/5



留学生制作の映画会

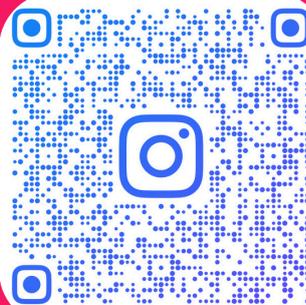
留学生のイレネさんが制作した映画  
の鑑賞&ディスカッション！

6/12



ファッションショー

アフリカの伝統衣装を着よう！



6/7



クッキングイベント

ザンビアの留学生と一緒にごはんを  
作って交流しよう！

6/11



トークショー

アフリカ音楽の魅力を伝えるコラ  
奏者、杵淵ちひろさんによるト  
ークショー！

他イベント  
と同日



アフリカ布の小物販売

アフリカ布を使った筆箱やマグネ  
ットなど手作り小物を販売！

# 伝統楽器から知る西アフリカの音楽



2025

6/11(水)

12:40p.m~

2:10p.m (日本時間)

場所：【対面開催のみ】

115教室

(研究講義棟1F/

東京外国語大学・府中キャンパス)

言語：日本語

参加費：無料

講演者：杵淵ちひろ (コラ奏者)

コラは西アフリカに伝わる伝統楽器で、21本の弦を持つハープの一種。カラバッシュ (ひょうたん) と牛革で作られ、優雅で繊細な音色が特徴。語り部グリオによって演奏される。本公演では日本で数少ないコラ奏者の杵淵ちひろさんにコラの歴史やセネガルでの活動についてお話いただく。アフリカや音楽について考えましょう。

[事前のお申込みはこちら]



<https://forms.gle/qsmvrhi4NNBWLHkt8>

杵淵ちひろ (キネブチチヒロ)

東京墨田区生まれの杉並育ち。アフリカ音楽の魅力を伝えるコラ奏者であり、イベントオーガナイザー。幼少期から音楽に親しみ、ニューヨークでアフリカ音楽と出会い、その情熱をさらに深める。

演奏を始めてからは、レストランやカフェでの演奏から、各種イベント、動物園、船上まで、様々な場所での演奏を経験。丁寧な、歌の内容や文化的背景の説明を交えた演奏が好評。伝統曲を歌う歌声は現地のミュージシャンたちからも高く評価されている。

2022年に任意団体「Chez Adama」を設立し、日本を拠点に多様なアフリカンイベントを企画することで、その魅力を伝えてきた。2023年には国鑑NEO「音楽」(小学館)にコラと自身が掲載され、日本の子供たちにコラの音色を届ける機会を得る。2024年10月には、杉並区に「一般社団法人あなたとアフリカをつなぐ応援団シェ・アダマ」を設立、代表理事として「アフリカの音楽」を軸に、「知る」「つながる」「共に楽しむ」を大切に活動を推進している。



現代アフリカ地域研究センター

African Studies Center-TUFS

African Studies Center -Tokyo University of Foreign Studies

Tel: +81 42 330 5540 Fax: +81 42 330 5884

Email: [asc@tufs.ac.jp](mailto:asc@tufs.ac.jp)

Website: <http://www.tufts.ac.jp/asc/>

# Where Africa's people Speak: African Languages in Thought, Work, and Life

**【Speaker】 Prof. John M Mugane**

Visiting Professor (AfricanStudiesCenter TUFs), Professor (the Practice of African Languages and Cultures and Director of the African Language Program, Harvard University)

**【Abstract】**

This talk is a journey into how African languages are learned, spoken, and lived—not just studied. In African contexts, language is never just words; it's people, place, memory, and power.

From classrooms to clinics, from homes to courtrooms, African languages are everywhere—vibrant and alive.

These spaces aren't just physical. They're symbolic too: sites of identity, resistance, and cultural affirmation.

I'll explore three dimensions of language: *Thought, Work, and Life*.

In *Thought*, we look at how African languages shape how people think, learn, and imagine the world. They carry indigenous knowledge and challenge colonial assumptions—just think of Ngũgĩ wa Thiong'o's call to decolonize the mind.

In *Work*, we see how language policies shape real outcomes in courts, hospitals, and tech spaces. Translation and interpretation are not just services—they're economies.

In *Life*, language shows up in homes, markets, stories, songs, and online spaces. It's how people connect across generations and express who they are.

This talk pushes back—quietly but clearly—against the idea that African languages are fading or marginal.

They are spoken, taught, learned, and most importantly, lived. And where they're spoken—physically and symbolically—matters.

Because in every sense, language is a way of being in the world.



**HARVARD**  
UNIVERSITY

**Prof. John M. Mugane**

Born in the Republic of Kenya.

From 2006 ~present, He teaches at Harvard University as Professor of the Practice of African Languages and Cultures and Director of the African Language Program.



2025

6/26 (Thu)

5 : 40 p.m. ~

7 : 10 p.m. (JST)

Venue : **【Hybrid】**

Online : Zoom Meeting

Onsite : Room 109

(TUFs Research and Lecture Building 1F / Fuchu campus)

Language : English

Admission Fee : Free



Please register in advance

**Key Words :**

Africa's languages, linguistics, Language learning, The Asmara Declaration, AI in language learning, Ngũgĩ wa Thiong'o (Kenyan, Jan 5, 1938 - May 28, 2025)



現代アフリカ地域研究センター  
African Studies Center-TUFs

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 (研究講義棟 4階 401E-2 号室)  
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan  
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)  
Email: asc@tufs.ac.jp

# 第103回 ASC セミナー 日本アフリカ学会 関東支部 共催

## Where Africa's people Speak: African Languages in Thought, Work, and Life

【講演者】 John M. Mugane 教授

(東京外国語大学 現代アフリカ地域研究センター、ハーバード大学)

【要旨】 この講演は、アフリカの言語がどのように学ばれ、話され、生きているかを探る旅です。

アフリカでは、言語はただの言葉ではありません。それは、人々であり、場所であり、記憶であり、そして権力なのです。教室から診療所、そして家庭から法廷に至るまで、アフリカの言語はあらゆる場所に存在し、力強く生きています。こうした空間は単に物理的なものではありません。それらは象徴的なもので、アイデンティティ、抵抗、文化を示す場でもあります。

この講演では、言語の三つの側面「思考」「仕事」「生活」について探ります。

\*\*「思考」\*\*では、アフリカの言語が人々の考え方、学び方、そして「世界」の想像の仕方どのように影響を与えているかを考察します。

アフリカの言語には先住民の知識が含まれ、植民地的な前提に異議を唱えます。——たとえばングギ・ワ・ジオンゴによる「精神の脱植民地化」の呼びかけを考えてみましょう。

\*\*「仕事」\*\*では、言語政策が裁判所、病院、テクノロジー分野などでどのような現実を形づくるかを見ていきます。翻訳や通訳は単なる作業ではなく、経済を創り出すのです。

\*\*「生活」\*\*では、言語が家庭、市場、物語、歌、そしてオンライン空間にどのように現れるかを探ります。アフリカ言語は、人々の世代を超えたつながりであり、自分自身を表現する手段なのです。

この講演は、「アフリカの言語は衰退している」「限界的である」といった考えに対して、静かに、しかしはっきりと異議を唱えます。

アフリカの言語は話され、教えられ、学ばれ、そして何よりも「生きている」のです。そして、どこで言語が話されているか(物理的にも象徴的にも)が重要です。

なぜなら、あらゆる意味で、「言語」とはこの世界に存在する方法そのものだからです。



HARVARD  
UNIVERSITY

Prof. John M. Mugane (ジョン・ムガネ教授)

ケニア共和国生まれ。2006年～現在、アメリカのハーバード大学で教鞭をとる。ハーバード大学アフリカおよびアフリカ系アメリカ人研究学部アフリカ言語文化実践教授兼アフリカ言語プログラムディレクター



2025  
6/26(木)

5:40 p.m. ~

7:10 p.m. (日本時間)

場所: 【Hybrid】

Online: Zoom

Onsite: 109 教室

(東京外国語大学  
研究講義棟 1F/ 府中キャンパス)

言語: 英語

参加費: 無料



事前登録はこちら  
Please register in advance

キーワード:

アフリカの言語、言語学 (言語)、言語学習、アスマラ宣言、言語学習における AI、ングギ・ワ・ジオンゴ (ケニア作家、1938年1月5日～2025年5月28日没)



現代アフリカ地域研究センター  
African Studies Center-TUFS

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 (研究講義棟 4階 401E-2 号室)  
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan  
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)  
Email: asc@tufts.ac.jp

# 第104回ASCセミナー 日本アフリカ学会 関東支部 共催

## 南部アフリカにおける国境を越えた人の移動の歴史と現在 ——4世代にわたるマラウイ移民の経験を通して

### 【講演者】 佐藤千鶴子教授

(東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 教授、現代アフリカ地域研究センター)



写真1 ジョハネスバーグの雑貨店 (2015年11月撮影)

グローバルな移民研究では、「南から南へ」の移動の重要性が指摘されている。

1994年の民主化前後からアフリカ大陸内外の多くの国々から移民を惹きつけるようになった南アフリカは、アフリカにおける国際移動の中心地のひとつである。とはいえ歴史的に見れば、南アフリカは19世紀末から国際移動のリージョナルなハブであり、同国の近代化を率いた金鉱業では、南部アフリカの植民地各国で斡旋された移民労働者が多数雇用されていた。

本セミナーでは、マラウイ北部の村落に住む移民送出し世帯と、南アフリカのジョハネスバーグ市で非正規移民として生活するマラウイ人への聞き取り調査をもとに、20世紀初頭から今日に至るまでの4世代にわたるマラウイ人の移民経験の変遷について報告する。

さらに、この地域から南アフリカへの移民労働が1世紀以上にわたり継続してきた理由とそれを支えるメカニズムについて考察する。



写真2 ジョハネスバーグの公園 (2015年11月撮影)

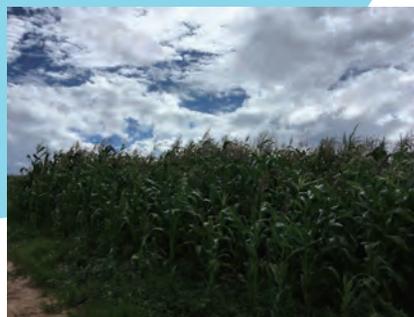


写真3 マラウイ北部の村落のメイズ (とうもろこし) 畑 (2020年3月撮影)

# 2025 7/3 (木)

5:40 p.m. ~

7:10 p.m. (日本時間)

場所: 【Hybrid】

Online: Zoom

Onsite: 107 教室

(東京外国語大学  
研究講義棟 1F/ 府中キャンパス)

言語: 日本語

参加費: 無料

Key words:

南南移動、南アフリカ、マラウイ、  
移民労働、非正規移民

事前登録はこちら  
Please register in advance



現代アフリカ地域研究センター  
African Studies Center-TUFS

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 (研究講義棟4階 401E-2号室)  
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan  
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)  
Email: asc@tufts.ac.jp

# “Why Coffee Needs a Geography: Mapping Meaning from Asia to Africa”

## 【Speaker】 Dr. Ohsoon Yun

Special Researcher, African Studies Center TUFs

Dr. Ohsoon Yun is a geographer and coffee researcher whose Asia Coffee Road project explores the cultural and spatial dynamics of coffee across continents. As founder of Beletu Inc., she bridges scholarship and fieldwork, focusing on narrative, mobility, and sensory experience in global coffee culture.

## 【Abstract】

While a ubiquitous global commodity, coffee's profound influence on place and identity often goes unexamined. This talk introduces Coffee Geography as a new academic field that investigates how coffee's journeys, narratives, and sensory experiences shape spatial meanings across Asia and Africa. Drawing from human and cultural geography, this framework positions coffee not only as a global product but as a moving signifier—a cultural medium that acquires new meanings as it travels between regions.

Blending narrative and sensory analysis, I argue that coffee enables the construction of imagined geographies, linking distant places through shared tastes, stories, and symbolic associations. By tracing coffee's layered histories—from its African origins to its reinvention in Asian contexts—I explore how coffee mediates belonging, identity, and global connection.

Ethnographic examples and case studies will illustrate how everyday coffee practices foster unexpected connections and remap relationships between cultures. Ultimately, this talk calls for a more reflexive and sensory-oriented approach to commodity studies, revealing how even a daily drink can reshape our understanding of space, self, and the world.

**Key words:** Coffee Geography, Asia–Africa, Imagined Geography, Narrative Mobility, Sensory Experience

Language: English · Admission: Free



Register in advance



Photo by Dr. Ohsoon Yun



2025  
7/10 (THU)

5 : 40 p.m. ~

7 : 10 p.m. (JST)

Venue: **【Hybrid】**

Online: Zoom

Onsite: Room 113

(TUFs Research and Lecture Building 1F / Fuchu campus)



# 『コーヒーが地理学を必要とする理由： アジアからアフリカへ意味をマッピングする』

## 【講演者】ユン・オスン博士

(現代アフリカ地域研究センター・特別研究員)

ユン・オスン博士は、地理学者でありコーヒー研究者である。彼女の「Asia Coffee Road」プロジェクトは、大陸を越えたコーヒーの文化的・空間的ダイナミクスを探究している。Beletu 株式会社の創設者として、研究とフィールドワークを融合させ、グローバルなコーヒー文化におけるナラティブ、移動性、感覚的体験に焦点を当てている。

### 【要旨】

世界中で日常的に飲まれているコーヒーは、単なる嗜好品ではなく、場所やアイデンティティに深く関わっている存在である。本講演では、「コーヒー地理学」という新たな学術分野を提案し、コーヒーの移動、物語、そして感覚的な体験が、アジアおよびアフリカにおける空間的意味や文化的想像力をどのように形成しているのかを探っている。

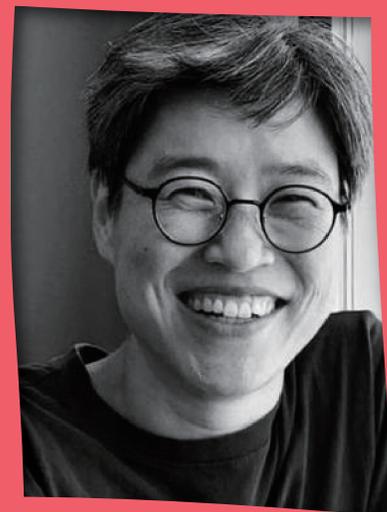
この研究は、人文地理学・文化地理学の文脈において、コーヒーをグローバルな商品であると同時に、地域ごとに意味を変えながら移動している「ムービング・サイン（移動する記号）」として位置づけている。アフリカでの起源からアジアでの再解釈に至るまで、コーヒーにまつわる多層的な歴史と語りを辿ることで、帰属意識や文化的なつながりを媒介している様子を明らかにしている。

エスノグラフィと事例研究を通じて、日常的なコーヒーの実践が、地理的に離れた地域間に新たなつながりを生み出し、それらの関係を再マッピングしている。最終的に、本講演では、より内省的かつ感覚志向の視点からコモディティを理解する必要性を提起しており、コーヒーという身近な飲み物が、私たちの空間、アイデンティティ、そしてグローバルなつながりに対する思考を再構築していることを示している。

#### Key words:

コーヒー地理学、アジア-アフリカ、イマジナリー・ジオグラフィ、ナラティブ・モビリティ、感覚的体験

言語：英語 参加費：無料



2025  
7/10(木)

5:40 p.m. ~

7:10 p.m. (日本時間)

場所：【Hybrid】

Online: Zoom

Onsite: 113 教室

(東京外国語大学 研究講義棟 1F/  
府中キャンパス)



事前登録はこちら

Photo by Dr. Ohsoon Yun



現代アフリカ地域研究センター  
African Studies Center-TUFS

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 (研究講義棟4階 401E-2号室)  
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan  
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)  
Email: asc@tufts.ac.jp

# 第106回 ASC セミナー

## 『キベラスラムの人々と共に生きる』

【講演者】早川千晶（はやかわ・ちあき）氏

（ケニア在住37年・マゴソスクール主宰）

ケニアで暮らした37年の経験、特にキベラスラムで困難な社会状況の中、スラムの人々と共に未来への希望を生み出していく活動について語ります。



ケニア在住37年。大学生のときに世界放浪の旅に出発。世界各国を旅し、そのまま日本に帰らずケニアに定住。社会的に不利な立場にある民族や貧困地区のコミュニティと共に活動を開始。撮影コーディネーター、ライター、通訳、「アフリカを深く知る旅」案内人。マサイ民族とドゥルマ民族の村でホームステイ&伝統文化体験のエコツアー、キベラスラムのスタディツアーなども手掛け、アフリカ理解と国際交流を促進している。

東アフリカ最大の貧困地区キベラスラムで孤児や困窮児童のための学校「マゴソスクール」、モンバサ近郊のミリティーニ村で「ジュンバ・ラ・ワトト」（子どもの家）、高校生・大学生のための奨学金グループ「マゴソ OBOG クラブ」、障害児の特別学級、スラム貧困者の生活改善支援、スラムの若者たちのエンパワーメント「MCC-Magoso Community Center」などをスラム住民のリリアン・ワガラと共同設立運営。

◆著書に 2000年「アフリカ日和」（出版・旅行人）

2013年 在ケニア日本大使館在外公館長表彰

2015年 度第5回賀川賞受賞

2018年 ドゥルマ民族の伝統継承者「旗持」に就任

2021年 第56回社会貢献者表彰

2021年 日本版ニューズウィーク「世界に貢献する日本人30」

2023年 令和5年度外務大臣表彰受賞

# 2025 10/1(水)

言語：日本語 参加費：無料

5：40 p.m. ～

7：10 p.m. (日本時間)

場所：【Hybrid】

Online: Zoom

Onsite: 115 教室

(東京外国語大学 研究講義棟 1F/  
府中キャンパス)



事前登録はこちら



現代アフリカ地域研究センター  
African Studies Center-TUFS

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 (研究講義棟4階 401E-2号室)  
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan  
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)  
Email: asc@tufs.ac.jp

# 第107回ASCセミナー 日本アフリカ学会 関東支部 共催

## 『ケニアのZ世代による2024年の抗議行動とその余波—民族的パトロネージの民主主義国における待機状態とデジタル・ストーリーテリング』

### 【講演者】レイバン・キティンジ＝キニユア博士

(東京外国語大学・現代アフリカ地域研究センター・特別研究員)

上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科にて博士号取得。

専門はアフリカ政治、デジタルエスノグラフィー、若者研究。ナイロビのスラムでの民族誌調査も実施。民主主義、社会変革、政治参加に関するグローバルな議論とアフリカの生きた経験を橋渡しするような研究を志向している。

### 【要旨】

2024年にケニアで発生したZ世代主導の抗議行動は、同国の政治史における裂け目となり、根強い民族政治の構造と国家が支配するナラティブに対する挑戦となった。財政法案が即時撤回され、内閣が解散されたことは重要な勝利であったが、その後の状況を見ると、パトロネージ政治と民族的結束により形作られる体制のもとで、分散的・指導者不在・部族不在の運動を維持することには構造的な脆弱性が存在することが明らかになった。

本報告では、Z世代の抗議行動をアルシダ・ホンワナが提示した「待機状態 (waithood)」の概念に位置づける。この概念は、失業、不安定な状況、排除によりアフリカの多くの若者が陥っている、長期化した社会経済的な宙ぶらりん状態をとらえたものである。

ケニアの若者にとって、2024年財政法案の懲罰的な課税制度はこの状況を明白にし、経済的・政治的包摂をあまりにも長く「待ち続けた」世代を奮起させるものだった。こうして抗議行動は、待機状態を集団的に拒否するものとなり、国家からの認知と国家に対する説明責任を求めるものとなった。

同時に本研究では、抗議行動を動員し、持続させた戦略として、デジタル・ストーリーテリングの重要性を強調する。TikTok、YouTube、ポッドキャスト、ミームを通じて、ケニアの若者たちは個人的な苦闘を語り、市民としてのアイデンティティを再構築し、民族の境界を超えた抵抗の道徳的共同体を築いた。これは現在も続いている。証言から風刺、噂に至るまでのデジタル・ストーリーテリングは、抗議行動をオンライン上で持続させ、その記憶と緊急性が街頭を超えて確実に持続するようにした。

待機状態とデジタル・ストーリーテリングを前面に押し出すことで、本研究は、Z世代の抗議行動が単発的な異議申し立て以上の意義を持つと論じる。これらは、ケニアの民族政治的な秩序に挑戦する若者の政治的動員の新たな形態であり、デジタルを介した市民的帰属を通じた民主的な参加を再定義する可能性を秘めたものである。

#### キーワード:

Z世代の抗議行動、待機状態、デジタル・ストーリーテリング、デジタル・アクティビズム、民族的動員、集団行動の問題、若者の政治動員、ケニア

言語：英語 参加費：無料



2025  
11/6(木)

5:40 p.m. ~

7:10 p.m. (日本時間)

場所：【Hybrid】

Online: Zoom

Onsite: 109 教室

(東京外国語大学 研究講義棟 1F/  
府中キャンパス)

事前登録こちら



現代アフリカ地域研究センター  
African Studies Center-TUFS

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 (研究講義棟4階 401E-2号室)  
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan  
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)  
Email: asc@tufs.ac.jp

## “Kenya’s 2024 Gen Z Protests and the Aftermath: Waithood and Digital Storytelling in an Ethnic-Patronage Democracy”

**【Speaker】 Dr.KINYUA Laban Kithinji**  
(Research Fellow, African Studies Center TUFS)

Dr. Kinyua Laban Kithinji is a Research Fellow at the African Studies Center, Tokyo University of Foreign Studies (ASC-TUFS).

He holds a PhD in Area-based Global Studies from Sophia University. His research focuses on African politics, digital ethnography, and youths. He has also conducted ethnographic research in Nairobi’s informal settlements. His scholarship seeks to bridge African lived experiences with global debates on democracy, social transformation, and political participation.



### 【Abstract】

The 2024 Gen Z-led protests in Kenya marked a rupture in the country’s political history, challenging entrenched ethnopolitical structures and state-controlled narratives. While the immediate withdrawal of the Finance Bill and the dissolution of the cabinet represented important victories, the aftermath revealed the structural fragility of sustaining a decentralised, leaderless, and tribeless movement in a system still shaped by patronage politics and ethnic alignments.

This paper situates the Gen Z protests within Alcinda Honwana’s concept of waithood, which captures the prolonged socio-economic limbo in which many African youth find themselves due to unemployment, precarity, and exclusion.

For Kenyan youth, the punitive tax regime of the 2024 Finance Bill crystallised this condition, galvanising a generation that has “waited” too long for economic and political inclusion. The protests thus became a collective refusal of waithood, signalling a demand for recognition and accountability from the state.

At the same time, the study highlights digital storytelling as the strategy that has both mobilised and sustained the protests. Through TikTok, YouTube, podcasts, and memes, young Kenyans narrated personal struggles, reframed civic identity, and built a moral community of resistance that transcended ethnic boundaries. And this continues to date. Digital storytelling—ranging from testimonies to satire and even rumours—has kept the protests alive online, ensuring their memory and urgency persist beyond the streets.

By foregrounding waithood and digital storytelling, this paper argues that the Gen Z protests represent more than episodic dissent. They reveal emerging forms of youth political mobilisation that challenge Kenya’s ethnopolitical order and hold the promise of redefining democratic participation through digitally mediated forms of civic belonging.

**Keywords:** Gen Z protests; Waithood; Digital Storytelling; Digital Activism; Ethnic Mobilisation; Collective Action Problem; Youth Political Mobilisation; Kenya

Language: English Admission: Free

2025  
11/6(Thu)

5 : 40 p.m. ~  
7 : 10 p.m. (JST)

Venue: **【Hybrid】**

Online: Zoom

Onsite: Room109

(TUFS Research and Lecture Building 1F / Fuchu campus)



**Register in advance**



## “Waithood in Motion: Imagined futures, (im)mobilities and waiting among Cameroonian and Ethiopian migrants”

### 【Speaker】 Dr. Henrietta NYAMNJOH

(Resercher at University of Cape Town, Visiting Professor at African Studies Center, TUFS)

Dr Henrietta Nyamnjuh is a researcher with the Mobility and Migration Hub at the University of Cape Town. She is a former researcher with the South-South Migration, Inequality and Development Hub at the University of Cape Town. She holds a PhD and an MPhil from Leiden University, the Netherlands. She has researched and published widely on Hometown Associations, the migrant economy and everyday lives, the appropriation of Information and Communication Technologies (ICT), among migrants in South Africa, and Pentecostal religion in the context of migration and transnational mobilities in search of faith and spiritual healing.



### 【Abstract】

This paper examines “waithood” – the prolonged period of waiting and uncertainty experienced by young people – among Cameroonian and Ethiopian migrants in Cape Town, South Africa. Drawing on multi-stage research conducted in both home and host countries, I trace how waithood manifests across the entire migration journey, from the aspirations of youth in Cameroon and Ethiopia to the realities faced by those already established in South Africa.

Challenging the idea of waithood as a static, pre-migration phase, this analysis reveals it as a dynamic process characterized by motion and change. I argue that waithood extends throughout the migration journey, encompassing various forms of waiting and uncertainty that are actively navigated by young migrants. By adopting a gendered and long-term perspective, I show how young men and women strategically adapt their planning and leverage factors like imagined futures and migration networks in pursuit of their goals.

Ultimately, this research sheds light on the complex nature of waithood, demonstrating that it is not simply a period of stagnation but one of significant productivity. It fosters resilience, collective action, and strategic planning as young migrants maintain hope, resilience and actively shape their lives in the face of challenging circumstances.

#### Keywords:

Waithood in motion, migration, aspiration, imagined futures, gender, South Africa, Cameroon, Ethiopia.

Language: English Admission: Free

Register in advance



# 2025

# 11/14 (Fri)

5 : 40 p.m. ~

7 : 10 p.m. (JST)

Venue: **Hybrid**

Online: Zoom

Onsite: Room 102

(TUFS Research and Lecture Building 1F / Fuchu campus)



# 第108回ASCセミナー 日本アフリカ学会 関東支部 共催

## 『動きの中の待機状態： カメルーン人およびエチオピア人移民の 想像する未来、(非)移動性、待つこと』

### 【講演者】ヘンリエッタ・ニヤムンジョ博士

(ケープタウン大学・研究員、東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター・客員教授)

ケープタウン大学のモビリティと移民拠点の研究員。同大学の南南移動・不平等・開発拠点の元研究員でもある。オランダのライデン大学で修士号と博士号を取得。

南アフリカにおける移民を対象としたホームタウン・アソシエーション、経済、日常生活、情報通信技術 (ICT) の活用、信仰と精神的な癒しを求める国境を越えた移動について幅広く研究してきた。研究関心は、子どもの移動と不平等、移動とモビリティ、トランスナショナル研究、移動と健康、女性の日常生活と周縁性、移動の文脈における宗教、宗教と癒しの関係性など多岐にわたる。

### 【要旨】

本発表では、南アフリカのケープタウンにおけるカメルーン人およびエチオピア人移民の「待機状態 (waithood)」、すなわち若者が経験する長期にわたる待機と不確実性について検証する。母国と受入国の両方で実施された多段階調査に基づき、カメルーンとエチオピアにおける若者が抱く願望から、南アフリカに既に定住した人びとが直面する現実まで、移民の全行程にわたる待機状態がどのように現れるかを追う。

分析では、待機状態を移住前の静的な段階とする考え方に異議を唱え、動きと変化を特徴とする動的プロセスであることを明らかにする。そして待機状態は、移住の全行程に及び、若年層の移民が積極的に対処する多様な待機と不確実性を包むと論じる。ジェンダーと長期的な視点を採り入れることで、若い男女がどのように戦略的に計画を調整し、想像する未来や移民ネットワークといった要素を目標達成のために活用しているのかを示す。

最終的に本発表では、待機状態の複雑な性質を明らかにし、それが単なる停滞期ではなく、生産性が著しく高まる時期であることを示す。若年層の移民が困難な状況に直面しながらも希望とレジリエンスを維持し、積極的に自らの人生を形作る過程において、待機状態はレジリエンス、集団的行動、戦略的計画を育むのである。

キーワード：動きの中の待機状態、移民、願望、想像する未来、ジェンダー、南アフリカ、カメルーン、エチオピア

言語：英語 参加費：無料



# 2025 11/14(金)

5:40 p.m. ~

7:10 p.m. (日本時間)

場所：【Hybrid】

Online: Zoom

Onsite: 102 教室

(東京外国語大学 研究講義棟 1F/  
府中キャンパス)

事前登録こちら



現代アフリカ地域研究センター  
African Studies Center-TUFS

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 (研究講義棟4階 401E-2号室)  
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan  
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)  
Email: asc@tufts.ac.jp

# 第109回ASCセミナー 日本アフリカ学会 関東支部 共催

## 『アフリカのG20か、 それともアフリカで開催されたG20か—— 南アフリカのG20議長国に関する概観』

【講演者】タワンダ・サチコニェ博士

(南部アフリカ・リエゾン・オフィス研究コンサルタント)

ケープタウン大学で政治学の博士号取得。外交政策の専門家及び国際関係の研究者として、南アフリカの貿易と経済外交、南アフリカとジンバブウェの関係、南部アフリカ地域及びアフリカ大陸における南アフリカの役割、国連安全保障理事会における南アフリカの取り組みに関する研究を実施。南アフリカの外交政策提言に関する市民社会の活動に13年間従事した経験も持つ。

### 【要旨】

本報告の目的は、南アフリカの2025年G20議長国としての取り組みについて、洞察力に富んだ包括的な概観を示すことである。南アフリカのG20議長国就任は、1999年の創設以来初めて、アフリカの国が同フォーラムの議長国を務めるといふ、歴史的で画期的な出来事だった。特に重点を置くのは、G20議長国南アフリカがどの程度「アフリカ的」なG20を実現したかについての評価である。この点に関連して、アフリカ連合(AU)がG20の正式な一員として最近加盟したことは注目に値する。さらに、南アフリカのG20議長国の任期は、グローバルサウスの国々がG20を主導した、波乱に満ちたサイクルの終焉を意味する。この期間、インドネシア(2022年議長国)、インド(2023年議長国)、ブラジル(2024年議長国)が、グローバルな経済ガバナンスと金融機関への途上国の更なる包摂と代表性の強化を強く提唱してきた。

本報告ではさらに、困難な国際情勢のなかで、南アフリカがアフリカの「開発アジェンダ」を提唱すると同時に、より広範なサウス-サウス及びノース-サウス(日本と南アフリカの協力強化を含む)の多国間協力を強化しようとしてきた経緯を探る。

最終的には、南アフリカのG20議長国としての遺産が次の諸点においてどのようなものとなるかを評価することを試みる：

- ◆グローバル経済ガバナンスの場でのAUの声の増幅
- ◆深刻化し、持続不可能なアフリカの債務問題に対する適切な解決策の提示
- ◆アフリカの人的資本ニーズをG20の今後の議題に確実に位置づけること
- ◆課題(次期議長国アメリカが南アフリカの主導するG20に反対した経緯を含む)
- ◆一般のアフリカ市民による、南アフリカの歴史的なG20議長国に対する認識

キーワード：南アフリカ、G20議長国、アフリカ的、アフリカ連合、債務、人的資本、グローバル経済ガバナンス、多国間協力



2025  
12/17(水)

5:40 p.m. ~

7:10 p.m. (日本時間)

場所：【Hybrid】

Online: Zoom

Onsite: 103 教室

(東京外国語大学 研究講義棟 1F/  
府中キャンパス)

言語：英語 参加費：無料

事前登録こちら



現代アフリカ地域研究センター  
African Studies Center-TUFS

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 (研究講義棟4階 401E-2号室)  
3-11-1 Asahicho, Fuchu, Tokyo 183-8534 Japan  
(Room 401E-2, Research and Lecture Bldg.)  
Email: asc@tufts.ac.jp

## “An African G20 or a G20 in Africa: A preliminary overview of South Africa’s G20 Presidency”

【Speaker】 **Dr. Tawanda SACHIKONYE**

(Research consultant for the Southern African Liaison Office (SALO), South Africa)

Dr Tawanda Sachikonye obtained his PhD in Political Studies at the University of Cape Town. As a foreign policy expert and international relations researcher, he has conducted research on South Africa’s trade and economic diplomacy, South Africa’s relations with Zimbabwe; South Africa’s role within the region and continent; as well as South Africa’s engagements at the United Nations Security Council. Moreover, he has thirteen years’ experience dealing with civil society engagements pertaining to South African foreign policy advocacy.



### 【Abstract】

This presentation seeks to provide a perceptive and informed overview of South Africa’s 2025 G20 Presidency. South Africa’s leadership of the G20 marks a significant historic landmark as it is the first time an African country has chaired the G20 forum since its inception in 1999. A special emphasis will be placed on evaluating the extent to which South Africa’s G20 Presidency has provided a uniquely ‘African’ G20. In this regard, the recent accession of the African Union (AU) as a formal member of the G20 framework is particularly noteworthy. Furthermore, South Africa’s G20 marks the end of an eventful cycle of Global South G20 leadership; during which Indonesia (2022), India (2023), and Brazil (2024) have strongly advocated for greater inclusion and representation of developing countries within global economic governance and finance institutions.

The presentation will also explore how South Africa has sought to advocate for the African “developmental agenda” whilst also trying to consolidate broader South-South and North-South (including enhanced Japan-South Africa partnership) multilateral cooperation within a fraught and challenging international context.

Ultimately, the presentation will attempt to assess what the legacy of South Africa’s G20 might be in terms of:

- ◆ amplifying the AU’s voice within global economic governance forums;
- ◆ adequately addressing Africa’s increasingly adverse and unsustainable debt levels;
- ◆ ensuring that Africa’s pressing human capital needs are firmly placed on the G20’s agenda going forward;
- ◆ challenges (including how the incoming G20 Chair, the United States, has opposed South Africa’s G20 leadership); and
- ◆ ordinary African citizens’ perception of South Africa’s historic G20 Presidency.

**Keywords:** South Africa, G20 Presidency, African, African Union, debt, human capital, global economic governance, multilateral cooperation.

2025  
12/17(Wed)

5 : 40 p.m. ~

7 : 10 p.m. (JST)

Venue: 【Hybrid】

Online: Zoom

Onsite: Room 103

(TUFS Research and Lecture Building 1F / Fuchu campus)



Language: English Admission: Free

Register in advance



ワークショップ形式

# 『カラハリ狩猟採集民の道具を観察する』

【講演者】中川裕教授

(東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 / 現代アフリカ地域研究センター教員)

【要旨】

ボツワナ共和国の中部カラハリ地区で遊動生活をしていたカラハリ狩猟採集民が、伝統的な生業で用いていた道具の実物を展示します。それぞれの道具の範疇・分類、機能、素材と制作技能などを、現地で記録した写真資料や、言語学的な調査資料を使いながら解説します。参加者は、展示する道具に直接触れて、その大きさ・形状・重量・触感・構造などを確かめながら、注意深く観察する経験をします。参加者の各々が物質文化を見る際の自前の問題意識をもてるようになることが期待されます。

キーワード：カラハリ狩猟採集民、道具



2026  
1/28(水)

5:40 p.m. ~

7:10 p.m. (日本時間)

場所：【Hybrid 形式】

Online: ZOOM ミーティング

Onsite: 104 教室

(東京外国語大学 研究講義棟 1F/  
府中キャンパス)

言語：日本語 参加費：無料

事前参加登録は  
こちら



## 「先住性」の多義性：南アフリカからの示唆

### 【講演者】ラファエル・ヴェアボイスト博士

専門は歴史学と人類学。現在、ベルギーのゲント大学歴史学部ジュニアポスドク研究員および南アフリカのジョハネスバーグ大学人文学部上級研究員。ポストアパルトヘイト期の南アフリカ、入植植民地主義、先住性、民族誌的調査法について研究を行っている。

### 【要旨】

「先住」の概念はひどくあいまいで、アフリカでは特にそうである。本報告では、南アフリカにおける民族誌的調査に基づき、このあいまいさが、「先住」と「非先住」に関する問題を抱えた3つの二分法——原始性 vs 近代性、先住者 vs 後から来た者、包摂 vs 排除——により生じていることを示す。このような二分法には長い歴史があり、現在もよく使われている。二分法が支持されるのには多様な理由があり、先住民と自称する人びとを含む多様なアクターからも支持を得ている。

本報告で提案するのは、アイデンティティや帰属意識、あるいは歴史にすら根付いていない、「先住」に関する代替的な分析枠組みである。先住性を相対的に理解することを提唱する学術的潮流に依拠しながら、本報告では、「先住」を入植植民地という特定の場における周縁化の現代的形態として理解すべきであると主張する。入植植民地主義とは一種の構造的抑圧であり、南アフリカで起こったのと同様に、入植者が自らの出身都市を超えて、永続的な入植地を確立する際に発生する。入植植民地の観点からの理解には欠点もあるが、この見方は先住民活動家の不満を正当に評価し、このカテゴリーに当てはまらない可能性のある人びとへの意味合いに微妙なニュアンスを加えられる。それゆえ、この枠組みを用いることで、きわめて論争的で非生産的になりがちな議論を冷静に行うことができるだろう。

キーワード：先住民、入植植民地主義、コイサン、南アフリカ、エスニシティ

言語：英語 参加費：無料



2026  
3 / 5 (木)

16時00分～  
17時30分 (日本時間)

場所：【Hybrid形式】  
Online: ZOOM ミーティング  
Onsite: 102 教室  
(東京外国語大学 研究講義棟 1F/  
府中キャンパス)

事前参加登録は  
こちら



## The many meanings of 'indigenous': lessons from South Africa

### 【Speaker】 Dr. Rafael VERBUYST

Rafael Verbuyst is a historian and anthropologist. He is a Junior Postdoctoral Researcher at Ghent University's History Department and a Senior Research Affiliate at the Faculty of Humanities at the University of Johannesburg. His research focuses on post-apartheid South Africa, settler colonialism, indigeneity, and ethnographic methodology.



### 【Abstract】

The concept 'indigenous' is notoriously ambiguous, especially in Africa. Drawing on ethnographic research in South Africa, I argue that this ambiguity stems from a divide between 'indigenous' and 'non-indigenous' that revolves around three problematic axes: pristineness vs. modernity; prior occupants vs. latecomers; inclusion vs. exclusion. These oppositions have long histories and remain commonplace. They are upheld for a variety of reasons and by a diverse set of actors, including by those who identify as indigenous.

I suggest an alternative analytical framing of 'indigenous' that is not rooted in identity, belonging, or even history. Building on scholarship advocating for a relational understanding of indigeneity, I argue that 'indigenous' should be understood as a contemporary form of marginalization within a specifically settler-colonial constellation. Settler colonialism is the type of structural oppression that ensues when settlers establish permanent settlements beyond their metropole, as happened in South Africa. A settler-colonial lens is not without pitfalls, but it allows us to better appraise the grievances of indigenous activists and nuance the implications for people who arguably do not fit that category. As such, I posit that my framework can reduce the temperature in what are often highly contentious and unproductive debates.

**Keywords:** indigenous people, settler colonialism, Khoisan, South Africa, ethnicity

2026  
3/5 (Thu)

4 : 00 p.m. ~

5 : 30 p.m. (JST)

Venue: **【Hybrid】**

Online: Zoom

Onsite: Room 102

(TUFS Research and Lecture Building 1F / Fuchu campus)

**Register  
in advance**



Language: English Admission: Free

